



# かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

## 報 恩 講

### 親鸞聖人のみ教えとともに

今はまさに報恩講（ほうおんこう）シーズン真ただ中です。親しく「ほんこさん」と呼ばれてきたこの法要は、親鸞聖人のご法事です。絶対他力のお念仏のみ教えを、その身を賭してお示し下さり、私たちに至り届けて下さったご苦勞をしのび、そのみ跡を慕って、阿彌陀如来の大慈悲のお救いを心に深くお味わいさせていただくご法要として大切に勤められてきました。

お念仏のあるところそれぞれに長年の伝統や地域色に培われた報恩講が勤められていきます。私もあちらこちらの報恩講で布教させていただきますが、どのお寺様に伺っても報恩感謝のお心で精一杯お勤めされているのに接しますと、お念仏とともに生かされてきたご門徒の親鸞聖人を慕うお気持ちの強さと喜び、ここまで守り伝えてきて下さったご苦勞に、手を合わせずにおれません。毎年報恩講を勤め終えたと、喜びの安堵でホッといたします。浄土真宗の1年は、報恩講で始まり、報恩講で暮れていくように感じています。

\* \* \*

**弥陀の名号となへつつ  
信心まことにうるひとは  
億念の心つねにして  
仏恩報ずるおもひあり**

親鸞聖人が晩年に著された数多い和讃の最初に記されたものです。

そこには二首書かれていて、これを「冠頭（かんとう）和讃」とよび、和讃全体が集約されていると言われるもので、本の「はしがき」にあたり、信心を勧める浄土真宗の肝要と言うべきものでしょう。

「弥陀の名号となへつつ 信心まことにうるひと」とは、正しい信心をいただいた人の姿をあらわしています。ただ単に口先だけ、形だけで、心がこもらずに称えているのではなく、何よりもその裏づけとして信心のある生活の中のお念仏をいいます。その信心とは、本願に対する疑いのない心を行い、この本願とは、平等にすべての衆生にそそがれる弥陀の純粋な慈悲心です。自分にそそがれる弥陀の大慈悲心に心を開いて、お念仏のある日暮らしをさせていただく人のことなのです。

「億念の心つねにして 仏恩報ずるおもひあり」は、たえず心の奥底で本願を念ずる心が続いていることです。ですから、おのずから自然に、仏さまのご恩に報謝する感謝の思いが伴っているお念仏が口をついてこぼれ出るので。思いの基本は、「おかげさまでありがとうございます」とお礼を申し上げる心持ちです。

\* \* \*

**誓願不思議をうたがひて  
御名を称する往生は  
宮殿のうちに五百歳  
むなしくすぐとぞときたもう**

もう一首の和讃です。これは、本願に対する疑いをもつことへの戒めの和讃で、お釈迦様の説かれた経典にある、浄土には2種類の人々がいる、という教えがもとに

なっています。

第一の人は、本当の信心をいただいた人で、変化してお浄土に生まれた「化生（けしょう）」といわれる人たちで、娑婆世界では煩惱にまみれていた凡夫ですが、仏法に教化（きょうけ）されて疑いのない真実信心を得た人々です。第二の人は、「胎生（たいしょう）」という人で、せっかく阿彌陀様のお慈悲によってお浄土に生を受けていながら、お浄土の片隅に眠っていて仏のはたらきをしていない人をさしています。何もかもから解き放たれたお浄土にいなながら、自分の疑いの心が邪魔をして世界が見えない状態のままをいうのです。この疑いとは、本願に対する疑いですが、わかり易く言えば「自己過信」「自力」です。自分の力を頼みとする心が捨てられないのです。したがって人から教えを受けるといふ気持ちが起こることもありません。宮殿とは、ちょうど母胎の中のように安全で居心地のよいところですが、五百年もとどまっていたは、せっかく仏とならせていただいたのに、大切な身近な縁ある人を導くことができないと説かれているのです。

\* \* \*

この世であてにしているものが思う通りにはならず、一つ一つ消えていく中であって、ともすると空しさばかりが広がっていきます。しかし私たちには仏となられた先人たちが日々の糧とし、生きるよりどころとし、今に至り届けて下さった、唯一確かで変わることのないお念仏のみ教えに恵まれています。正しい教え（真実）は「実る」ものです。どうぞお聴聞ください。

合掌

## 親鸞聖人報恩講法要

日時  
11月26日(水)  
午前11時

「真宗宗歌」  
正信偈  
～ 焼香 ～  
法話

真宗仏光寺派 郡家御坊  
妙圓寺住職 葦名 彰 師

ご文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～

おとき  
お抹茶接待

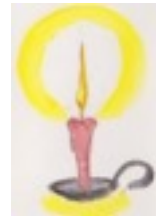
爽りの秋を迎える頃から1月の御正忌まで、海外、日本全国の真宗寺院、また宗門関連校では、宗祖親鸞聖人報恩講が勤められます。今では少なくなりましたが、かつては家庭でも勤められ、家族総出で仏具をお磨きし、紅白のお餅や色とりどりの砂糖菓子でお飾りの供物を作るなど、そこには報恩講を迎えるお待ち受けのうきうきした風景がありました。

この度は、大谷派(お東)の寺に生まれ、縁あって法然上人開基の仏光寺派の御坊の住職となった甥に法話をいただきます。五色の行事幕が似合う秋晴れになってくれることを願いながら、皆さまのお参りをお待ちしています。

どうぞお参り下さい。

## 妙好人のうた

生の意義とは  
弥陀にあうこと  
遇うたらこの世が  
よるこべる  
雨がふろうが  
風がふこうが  
(木村無相)



聴聞は、  
心得ておるは  
心のあやまりぞ、  
聴聞なされ  
心得たはなし

聞く人は  
他力自力の  
みずぎわたてて、  
聞けば、  
聞けば六字の  
声がする。

(才市)



アメリカで新婚間もない29歳の女性が余命宣告を受け、「安楽死」が認められたオレゴン州に引っ越し、《愛する家族、友人よ、さようなら。世界は美しかった。》の言葉を残して、自ら医者の方による薬を飲んで亡くなった。最初予定していた死の日には、まだ生きる体力が残っていたため実行できず、公表していたばかりに残酷な誹謗中傷も受けたが、間をおかずに決行されたようだ。■この「安楽死」といわれるものは、法的にはアメリカの5つの州と、オランダやスイスの一部でしか認められていない。日本の現状は、いわゆる「尊厳死」とよばれるものが選択できるか否かだが、それは、遅れているとか進んでいるとかではかる問題ではない。■日本での「尊厳死」は、あくまで患者本人の意思によって、終末医療に延命処置を施さず、痛み苦しみを取る治療だけにして自然死を待つことを意味するが、法律として明文化されていない上に、普段「死」を語ることを「縁起が悪い」と忌み嫌う価値観も根強くあって、うまくいかないことも多い。■現実には、延命処置はしていないといっても、肺炎を防ぐためという痰を機械で取り除く処置などはされており、本人は意識がないから痛くないとは聞かされても、その度の無意識にも拒否するような辛がる姿は苦しんでいるとしか見えず、家族としては見るに忍びない。自分なら痰を詰まらせてひと思いに死ぬか、肺炎になって早く死なせて欲しいと思ってしまう。■死の問題は自分だけではない、家族、友人、時には我が子かもしれず、誰もが必ず、しかもいつ迎えても不思議のないものだ。だからこそ、「こうして欲しい」ではない、「こうだったらいいね」を、日々の“気持ちの良い会話”の中でしておくことが一番だ。それが、家族共通の理想の死生観(生き方)となっていくだろう。しっかり準備したと豪語しても、誰も自分では弔えない。誰かに看てもらい、弔ってもらうもの。お任せするしかないものなのだから…。

Norimaru